千葉県を知ろう！ 千葉県の成り立ち編

「千葉」と「ふさの国」の由来

千葉県は、豊かな大地に育まれた農産物に恵まれています。また、全国１位の数を誇る貝塚が示すように、はるか昔の縄文時代から豊かな海の資源にも恵まれていました。

千葉県がこのような自然の恵み豊かな土地であったことは、「ふさ」の文字にも表れています。

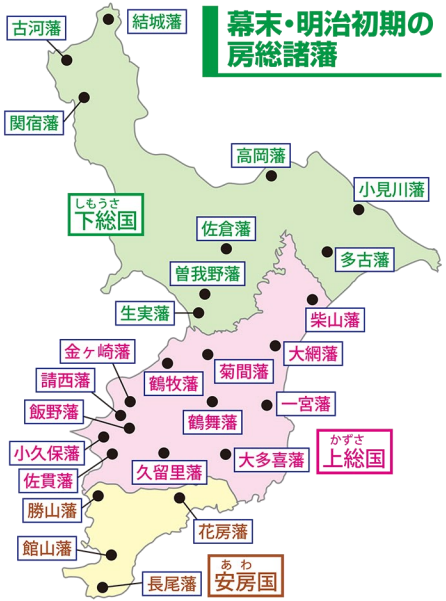
奈良時代の木簡（もっかん）では、上総のことを「上捄」と書いています。「捄」には「盛る」という意味と、「房をなして稔る果実」の意味があります。

また、平安時代初期の『古語拾遺（こごしゅうい）』には、麻を植えたところよく育ったので、麻の別名である「総」の名をとって「ふさ」の国と名付けたという説話があります。

一方、「千葉」の文字については、『万葉集』の中に、下総国千葉郡の大田部足人（おおたべのたりひと）が天平勝宝７年（755年）に詠んだ歌の冒頭に「知波乃奴乃（千葉の野の）」と記されています。

多くの葉が生い茂ったことを意味する「千葉」も「ふさ」と同じように、千葉県の豊かな土地にふさわしい名前といえるでしょう。

幕末・明治初期の房総諸藩



江戸時代の房総には、江戸から近いということもあって、幕府領・藩領・旗本領が複雑に配置されており、幕末には佐倉藩・大多喜藩・館山藩など17の藩がありました。

明治初年には、これらに駿河（するが）や遠江（とおとうみ）（いずれも現在の静岡県）から房総に領地を移された鶴舞藩・長尾藩などの７藩と曽我野（そがの）藩・大網藩が加わり、26藩となりました。

藩から県へ

房総では、明治４年（1871年）７月に廃藩置県（はいはんちけん）が実施され、房総にあった26の藩は新たに24の県になりました。

※請西（じょうざい）藩は廃止。大網藩は常陸国へ移転。

これに、明治２年（1869年）に旧幕府領や旧旗本領に設置された葛飾県と宮谷（みやざく）県を加えて、房総の県は26県になりました。

印旛県・木更津県・新治県の成立

明治４年（1871年）11月に行われた県の統廃合によって、房総にあった26県は印旛県・木更津県・新治県の３県になりました。

印旛県は下総国の西北部を、木更津県は上総国と安房国を、新治県は下総国の東部と常陸国（現在の茨城県）の南部を管轄しました。

また、印旛県の県庁は葛飾郡加（か）村（現在の流山市加）に、木更津県の県庁は望陀（もうだ）郡貝淵村（現在の木更津市貝淵）に、新治県の県庁は新治郡土浦町（現在の茨城県土浦市）に設置されました。

千葉県の成立

明治６年（1873年）６月15日、印旛県と木更津県とが合併し、千葉県が設置されました。

権令（ごんれい：同年６月29日から県令、現在の知事）には、旧竜野（たつの）藩士の柴原和（しばはらやわら）が任命され、県庁は千葉郡千葉町（現在の千葉市中央区）に置かれました。

当時の千葉県の人口は約103万人で、町村の数は2,785町村でした。

いまの千葉県のかたちへ

明治８年（1875年）５月７日、新治県が廃止され、これまで新治県に管轄されていた香取・匝瑳・海上の３郡が千葉県に編入されました。

また、同日、千葉県が管轄していた６郡（猿島、結城、岡田、豊田の４郡及び葛飾郡、相馬郡の一部）が茨城県に編入されました。

さらに、葛飾郡の一部は同年８月30日にも、埼玉県に編入されました。

これにより、千葉県は現在とほぼ同じかたちになりました。　【情報提供　千葉県庁】

「千葉県民の日」は、「県民が、郷土を知り、ふるさとを愛する心をはぐくみ、共に次代に誇りうる、より豊かな千葉県を築くことを期する日」として、県の人口が500万人を突破したことを記念して、昭和59年に制定されました。